

SANDOZ

Best Solution

for the Doctors

2024
Vol. 1

[CASE STUDY]

専門医であっても 全ての患者を診る力を

水野 晴夫 氏 藤田医科大学医学部小児科学 教授

名古屋圏の南東部から三河地方をカバーする藤田医科大学病院。同小児科の教授である水野晴夫氏は内分泌グループのリーダーとして、研究的な視点などを持ちながら診療に当たるよう若手医師を指導している。また、どのような患者にも対応できる診療能力を身に付けると同時に、患者が求める医療を提供できるようにコミュニケーション力を高めていくことも重視している。

先進医療を推進する大学病院で 若手医師の育成に注力する

藤田医科大学と同病院は広大な敷地に優秀な医師を数多く擁し、その豊富なマンパワーで先進医療に積極的に取り組む。「これまでできなかったことがここなら実現できる」と研修医からベテランまで集まってくる。

職員に対する教育も非常に細かく行き届き、エラーやインシデントが起きる毎に二度と起きないように再発防止を図るリスクマネジメントにも取り組んでいる。

同病院小児科は、ほぼ全ての専門領域をカバーできるほど専門医がそろい、主に名古屋圏の南東部から三河にかけて住む患者が受診に訪れる。

この小児科で内分泌領域を担当する教授の水野晴夫氏は、特に若手育成に注力している。「小児内分泌領域の中でも様々な専門領域がありますが、私は小児内分泌領域全ての疾患を診られるようになって、はじめ



て専門医を名乗れると思っています。ここに着任して4年経ちますが、小児内分泌の教育認定施設に認定されていることもあり、若い先生には小児内分泌の外来を受診する患者さんにまんべんなく対応できる診療能

力を身に付けてほしいと思っています」(水野氏)。

子どもの低身長の原因はホルモン異常に限らない。腎臓、消化器、肝臓、心臓など様々な臓器の疾患を抱えた患者が低身長という主訴で受診する。「このとき、自分の専門領域では異常がありません」と言って終わりにしてはならない。「小児の疾患全てを知った上で、どの専門領域の医師に引き継ぐべきか判断するまでが初診を担当する医師の責任」と水野氏は考えている。

人と接することが好きで 役立つ仕事として医師を目指す

水野氏は人と話すこと、関わるのが好きで、そのような仕事に就きたいと考えた。中でも人に喜ばれ、役立つ仕事として医師を選んだ。

名古屋市立大学医学部を卒業すると同大の小児科に入局した。教養課程の大学2年生の頃、「子どもと接していると、自分もいい感じで大人になっていけそうだ」と水野氏は思った。内分泌領域を専門にしようと考えたのは基礎医学で生理学の授業を受けたことがきっかけだ。ホルモンの作用など理詰めでも「攻めて」いける分野は「自分の性格に合っている」と感じたからだ。

「若い世代の医師によく話すことですが、何かを決めるとき、最初に頭に浮かんだやりたいと思ったことが最も純粋な気持ちを表しているのではないかな？ 今は初期臨床研修でいろいろな診療科を回り、それぞれの科のネガティブなことも気にしながら将来を検討しがちです。私は一生抱えていかななくてはならない病気

を持ったお子さんとご家族を支える重責など、辞めたくなくなるような大変な経験もしましたが、続けることができたのは、この仕事が好きだったからです。だから、最初に浮かんだ思いの通りにして結果として正解だったと今では思っています」(水野氏)。

患者・家族と目標を共有する コミュニケーションを重視

水野氏は、「以前に比べて思春期早発症が増えている」という印象を持っている。「意外と知られていませんが、思春期早発症の診断基準は存在しますが治療基準は存在しません。診断基準を満たした患者さんが紹介されてきますが、診療の結果、治療しなくてよい、治療しない方がよいと患者さんやご家族に伝える症例が出てきます」(水野氏)。

中枢性思春期早発症の場合、1.疾患が存在する、2.成人身長が低くなる、3.月経などの第二次性徴が幼い年齢で起きることによる心理的負担の3つが問題点となる。疾患がなく、身長も許容でき、第二次性徴にも対応できるなら、「治療するメリットはあまりない」と提案できる。

また、水野氏は「第二次性徴を抑える薬を使うことに抵抗を覚えないわけではない」とも話す。「薬で第二次性徴を抑えれば身長は伸び続けると誤解されている患者さんが多い。性ホルモンを抑える治療をすれば実際の身長の伸びも悪くなります。そうとは知らず、治療している患者さんがいるとすれば残念です」(水野氏)。

低身長の症例でも患者・家族とのコミュニケーションは大切だと水野氏は考えている。「成長ホルモンによる治療を開始すると、患者さんやご家族は大いに期待します。しかし、患者さんの治療前の状態や反応性によっては、患者さんが思われたほど成人身長が高くなることはありません。私はまず『成人したときはこれぐらいの身長になりそうです』と話し、治療中も常に『このまま行けば成人身長はいくつぐらいになりそうです』と伝えています。つらいのは、『身長が伸びる』と言われて治療を開始した患者さんを途中から私が担当するような場合です。『170cmぐらいになると思っていた』と言われることもあります。治療しなければ150cmの患者さんが治療で160cmになれば私は成功だと思いますが、患者さんは『せっかく治療した



思春期早発症に
治療基準はありません
患者さんの望みを尊重して
治療しない選択もあり得ます

のに……』と納得してくれません。このギャップを生じさせないことはとても重要です」(水野氏)。

若手に指導する診療ポイント3カ条

水野氏は、若手医師にも伝えている診療のポイントとして3カ条を掲げる。

1. 「初回診療を大切に」。患者との信頼構築のために言葉遣いから身だしなみまで整えて臨む。それをベースに患者が何を最も望んでいるかを把握する。一方で、「どういった言葉には過剰に反応するのか」といったことも注意深く観察する。
2. 「数字に振り回されない」。内分泌を専門にすると検査値を頼りにしがちである。だが、患者の全身を診るように心がけ、隠れた原因や合併症に気付くように丁寧な診察を行う。
3. 「健康な子に対しては、健康であると言ってあげる」。異常を疑って受診する患者や家族に、最小限の検査で問題ないことを確認できたら「健康です」と言う。小児科医にとって最も大切な、この姿勢を堅持すれば無駄な治療を行わずに済む。

バイオシミラーを通して臨床医が考えるべき課題

水野氏は患者・家族の理解を得てバイオシミラーを処方する。「国レベルでの医療費の増大を抑えるためにもバイオシミラーの重要性は高まっていると思います。特にバイオシミラーは第Ⅲ相の治療も行っていますし、これらを踏まえて臨床医も取り組んでいかなければならない課題だと思います」(水野氏)。

例えば、成長ホルモンなどのデバイスの使い方なども、水野氏は自ら患者に説明する。「ソマトロピンBS



藤田医科大学病院の外観。愛知県豊明市に立地し名古屋圏南東部から三河地方をカバーする

皮下注「サンド」シュアパルは、空気抜きや溶解操作が不要なところが長所だと思います。デザインもきれいですし。逆にダイヤルカバーが固めであること、注入ボタンが横にあること、カートリッジ交換の際にリセット操作が必要なところは気になります(図)。大事なのは良さと同時に注意点も含めて事前にはっきりと説明することです。それがその後の継続使用につながると考えます」(水野氏)。

事前対策による疾患予防に向け積極的に院外で講演する

進行する少子化を踏まえて、水野氏は小児内分泌の専門医の役割を次のように考えている。

「事前に対策して発症を未然に防ぐ疾患予防が大切になっていくと思います。難治性の疾患もたくさん残されていますので、その治療薬の開発にも力を入れていく必要があるでしょう」(水野氏)

疾患予防や事前対策を進めていく上で、水野氏は学校現場との連携を重視している。「年に1度は学校関係者の勉強会で講演させていただいています。また、市民公開講座での講演も同様のペースで行っています」(水野氏)。

未来を担う若手医師に対して水野氏は、「没頭できるテーマを見つけて、頑張っしてほしい」とメッセージを送る。「個人の価値観は100%全ての人が同じであるはずはありません。一致しないところはお互い議論すべきで、これが新しい発見や展開に結び付いていきます」(水野氏)。

図 ソマトロピンBS皮下注「サンド」シュアパル®の専用注入器



この PDF は、Best Solution for the Doctors 2024 Vol.1 から、著作権者の許諾を得て抜粋編集
しています。本冊子を希望の方は、サンド（株）の担当者に連絡ください。

[Best Solution for the Doctors] Vol.1

OMN2403C-NK

発行／サンド株式会社

2024 年 4 月作成

編集・制作／日経メディカル開発